様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２５２２

研究課題名（和文）新規コーパスを利用したフィラーと話法の分析に基づくテクスト談話構成の日仏対照研究

研究課題名（英文）A French-Japanse contrastive study on textual structure based on the analysis of narration and fillers by using new corpora

研究代表者
高垣　由美（TAKAGAKI, Yumi）

大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授

研究者番号：６０２５３１２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：日本語とフランス語の話法とフィラーに関する対照研究を行った。書き言葉に関しては，J.-M. Adamが提唱する発話レベルの４区分のスキーマが，話法との関連で親族名称名詞の多義性の説明に有効であることを示した。話し言葉に関しては，舌打ち音の談話機能を分析し，フィラーとの類似点を同定し，フィラーよりもさらに身体的表現寄りの要素であると結論づけた。主な資料としてオルレアン大学のESLOコーパスを初めとして，新規公開された大規模コーパスを使用した。これらの結果に基づき，日仏のテクスト構成の対照研究の基礎を築いた。

研究成果の概要（英文）：This contrastive study of Japanese and French focused on narration and fillers. For written texts, we have shown that the schema of four different utterance levels proposed by J.-M. Adam is effective in explaining the ambiguity proper to certain kinship nouns. As for oral discourses, by analyzing the functions of clicks in spontaneous speech, we have identified their characteristics as being similar to fillers. Our data were primarily obtained from large corpora recently made public, particularly the ESLO corpus. With this study, we have established a foundation for the contrastive study of text structures in Japanese and French.

研究分野：フランス語学

キーワード：テクスト　親族名詞　舌打ち　名詞文

１．研究開始当初の背景

(1) [研究動向]

テクストレベルの多言語間対照研究は，Kaplan (1966)を端緒とする対照修辞学として，外国語教育の分野で活発に取り上げられてきた。しかしより一般性のある多言語テクスト間比較については，Kennedy (1998)の比較修辞学等でわずかに展開されているだけで，未だ未発達であった。

(2) [これまでの研究成果の発展]

本研究代表者はこれまで，Adam (2008)のテクスト理論を元に日仏のテクスト構成の対照研究を行ってきた。本研究ではそれを発展させ，話法とフィラーを中心とした諸現象に着目し，テクストレベルの修辞と論理にかかわる言語間比較を対照言語学に基づいて行う。さらに新たに話し言葉の論理も一部組み込んで，書き言葉，話し言葉の両方を視野に入れた，より総合的，一般的な新たなテクスト談話理論の構築を目指す。

(3) [理論面の着想の経緯]

話法に関して日本語とフランス語で顕著な違いがあることは，先行研究でも指摘されており，統語的，語用論的な比較研究は，藤田(2000)，鎌田(2000)，中園(2006)を初めとして多く存在する。しかしこれらは，文法論，語用論の立場から短文を対象として論じられることが多く，テクストの理論の中で位置づけられることが少なかった。

(4) [新データ]

フランス語のコーパスデータは以前から複数存在するが，一部の内部研究者しかアクセスできず，ほとんど公開されていなかった。それが近年複数の研究機関の間でコンソーシアムの形成が進んだ結果，現在次々と新規公開されつつある。これまでは日本語ほど公開が進んでおらず，英語に比べて量で見劣りがしていたフランス語コーパスの環境は，ここ数年で劇的に状況が変化した。

２．研究の目的

話法とフィラーに着目して，テクストレベルの構成にかかわる日仏言語間の比較を行う。その資料として，近年フランスで公開されたばかりの大規模参照コーパスを用いると同時に，対面調査も実施して，最終的に書き言葉と話し言葉の両方を視野にいれた，一般的なテクスト談話理論を対照言語学に基づいて構築することをめざす。

本研究代表者はこれまで一貫して書き言葉のテクスト構成を研究してきたが，話し言葉の談話構成について，最近興味深い研究が出されたことに注目した。Wright (2005, 2007)は臨床言語学の立場から，これまで考察されてこなかった英語の吸着音の談話機能について論じている。本研究協力者の森田美里は，Wright とは独立に同様の現象をフランス語で観察し，歯茎吸着音の現れる談話文脈に一定の法則があることを発見，歯茎吸着音をフィラーと位置づける独創的な仮説を提唱した。そこで本研究ではこの仮説を組織的に検証し，これまで書き言葉しか扱ってこなかった研究に，話し言葉の論理を取り入れ，一般的なテクスト談話理論の中に位置づける。

３．研究の方法

本研究では，以下の研究方法をとった。

(1) 新規コーパスからのデータ抽出

関連する言語データを調べるにあたって，フランス語圏有数の質と規模を誇る ESLO コーパスを中心として使用した。このコーパスは研究協力者の Gabriel Bergounioux が所長を務めるオルレアン大学所蔵のもので，研究員のみがアクセスできる詳細なデータの使用の許可も容易に得ることができた。これ以外に，Ortolang (Outils et Ressources pour un Traitement Optimisé de la LANGue)に登録された大規模コーパスを積極的に利用した。

(2) インタビュー調査

話し言葉に表れるフィラーについて，日本とフランス，ベルギーで対面調査を行った。

(3) パラレル・コーパス作成

話法の複雑さに関して大きく異なる二種類の文体（小説と法令文）に注目し，日本語，フランス語に加えて英語等の複数の言語で同じ内容を表すテクストを材料として，パラレル・コーパスを作成し，類型論的観点からの考察にも着手した。

(4) 従来から言語研究で使われている，母語話者の内省も重視した。

４．研究成果

(1) [話法に関するスキーマ]

テクスト談話構成で，書き言葉に関しては，理論的基盤として Jean-Michel Adam が 2011 年の最新の著作 *La linguistique textuelle*（テクスト言語学）で発表した新しいスキーマを利用した。このスキーマでは，Emile Benveniste が発話レベルに関して提唱した Discours と Histoire (= Récit) の対立を発展させ，発話レベルを４つに分け，フランス語の時制の分布を説明している。本研究では，この Adam の４分法を，時制のみならず，話法に関連する他の言語現象の説明にも使えることを示した。遂行性が特に高い名詞である親族名称が，呼びかけとしてではなく，文の必要不可欠な要素として使われた時に持つ多義性に注目し，その分布が Adam の発話レベルの４分法できれいに説明できることを明かにした。結果として，このスキーマの適用可能性が，Adam の当初の主張よりも広いことを示した。この成果は後の「５．主な発表論文等」で記した論文 3)として発表した。

さらにこの Adam のスキーマを，日本語を初めとする他の言語との対照研究にも応用できないかを，作成したパラレル・コーパスを使って継続的に検証中である。

(2) [フィラーと舌打ち音]

話し言葉に関しては，フランス語の談話中に表れる舌打ち音に注目した。この音は単なる個人の癖ではなく，システマティックに表れることを発見し，その機能を記述した。この目的のために，研究協力者のベルグニュが管理する，オルレアン大学の話し言葉コーパス ESLO を用いて，舌打ち音の分布と生起率を調べた（約 8 時間分）。その結果，当初の予想に反して，生起率は 100%に近く，話し手の年齢・性別・社会階層に関わらず極めて広く分布を示していることがわかった。この大規模コーパスの利用により，データを飛躍的に増やすことができ，生起率と生起条件をかなり詳細に記述することができた。

そしてフランス語の舌打ち音をフィラーと比較した。この２つは極めて類似的なものではあるが，舌打ち音は意思的には用いられない点，無声音であると同時に音素とは認められない点，語尾伸ばし並びにイントネーションの付加ができないという点 に おいて，フィラーと異なっている。舌打ち音は，前後に境界の句切りとして無音のポーズを伴うことが多く，舌打ち音自身も音声的サインを伴う句切りという音韻的でも語彙的でもない分節の単位ではあるが，可能な解釈がある要素である。舌打ち音の談話機能を記述した上で，その言語学的な位置づけを考えると，身体的表現と言語表現との中間にあり，フィラーよりもさらに身体的表現寄りの要素，つまり，身体的表現の中で最も発声が大きいもの，かつ言語的表現の中で最も発声が小さい要素であると結論づけた。

このような舌打ち音の出現は，フランスのフランス語だけではなく，ベルギーのフランス語でも確認した。

また日本の国立国語研究所が公開しているコーパスを使って，日本語談話における吸着音の分布も調べた。その結果，ごく稀ではあるが，フランス語と同じような位置で，日本語談話でも生起することが観察された。この事実は，今後対照言語学の観点から発展させられる可能性を秘めている。

以上の舌打ち音に関する研究は，研究協力者の森田美里が，その博士論文（未公刊）に成果をまとめている。

(3) [応用研究]

テクスト研究の教育の分野への応用として，フランス語のアカデミック・ライティングと日本におけるその教育の意義に関する考察を行い，フランス的なテクスト構成の学習が日本人大学生にとって異文化理解の観点から有用である点を明らかにした。この成果は後の「５．主な発表論文等」で記した論文 4)として発表した。また〔その他〕で挙げた書評も，フランス語のアカデミック・ライティングに関する関心から生まれたものである。

(4) [研究成果発表]

本研究の成果発表としては，後の「５．主な発表論文等」に記しているように，研究代表者の学会発表 3 回，論文４本である。

中間段階の成果発表として，平成 28 年 7 月にフランス国トゥール市で開催されたフランス語学世界大会（学会発表 3），及びベルギー国リエージュ市で開催された国際フランス語教授連合世界大会（学会発表 2）で，それぞれ中間段階の理論的成果と教育への応用の成果を発表した。研究協力者の森田とベルグニュも，それぞれの大会で一回ずつ発表した。

本研究の最終結果は，2018 年 7 月にベルギーのモンス大学で開催される第 6 回フランス語学世界大会で発表することが決定している（学会発表 1）。ここでの考察をまとめた論文は当該学会の学会誌に掲載が決定している（論文 1）。この研究では，文法的結束性がなく，語彙的結束性のみでテクストが構成される数少ない例として，無冠詞の名詞文を取りあげた。この考察は，今後冠詞という文法的手段を持たない日本語のテクストとフランス語との対照研究で発展させられる見込みである。

また，インタビュー調査を行うに際して，大阪府立大学の研究倫理委員会の審査を受けたことがきっかけとなり，研究倫理の問題に関心を持ち，「５．主な発表論文等」の〔その他〕で挙げた，研究公正に関する研究協力者ベルグニュの講演記録を翻訳した。

(5) [社会還元]

上記研究発表以外の特筆すべき成果発表としては，国際シンポジウム一回，海外からの研究者を招いた講演会三回を，研究代表者の本務校の大阪府立大学で開催したことである。

<u>国際シンポジウム</u>としては，平成 29 年 5 月 27 日に「コーパス研究の現在—データから見る言語の実態」のテーマで，一般公開の研究集会を開催した。この会には研究協力者のガブリエル・ベルグニュ，国立国語研究所・専修大学准教授の丸山岳彦氏を迎えて，日仏の研究交流を促進した。丸山氏の講演は Japanese Corpus Linguistics: Its Methodology and Possibility のタイトルで英語で，ベルグニュの講演は Le passif : formes, valeurs, emplois. Une étude de cas à partir d’un entretien でフランス語で行われた。二講演とも通訳無しで，司会はいずれも高垣由美。丸山氏は，国立国語研究所で日本語コーパス構築に関わった経験に基づき，コーパスとは何かという概説か

ら始まり，日本語コーパスの歴史と現状を示した上で，コーパス日本語学が今後どのように展開していくか，その可能性について述べた。ベルグニュの講演内容は，最近公開されたオルレアンの話し言葉コーパスで，フランスを代表する量と質を誇る ESLO コーパスを使って，受け身構文を中心に現代フランス語の統語上の変化を明らかにし，新たな現象の存在を指摘，コーパス利用の意義を解説した。講演の後に約４０分にわたり，参加者と活発な意見交換が行われた。

単独の学術講演会は，海外からの研究者を招いて三回行った。

平成 28 年 1 月 9 日に研究協力者のオルレアン大学教授ガブリエル・ベルグニュを招へいし，Création morphologique et vocalisme en français（フランス語の母音体系と形態上の創造）と題して，言語変異について，本研究でも用いたオルレアン大学の ESLO コーパスからのデータを例にとった講演会を行った。

平成 29 年 7 月 27 日には，リエージュ大学現代言語研究所講師の Laurence Wéry 氏を迎え，Le français de Belgique（ベルギーのフランス語）と題して，言語変異について，ベルギーのフランス語を例にとった講演会を行った。

平成 29 年 9 月 17 日には，リエージュ大学現代言語研究所所長で，国際フランス語連合会長の Jean-Marc Defay 氏を迎え，「テクスト言語・認知・社会文化」をテーマとして演題 Le texte, à la croisée des approches linguistiques, cognitives et socioculturelles（言語学的・認知的・社会的アプローチの交差点としてのテクスト）のタイトルで講演会を行った。

さらに本研究の成果の延長として，公開シンポジウムを開催予定である。平成 30 年 5 月 26 日，大阪府立大学人間社会システム科学研究科主催，日本フランス語フランス文学会関西支部の後援を得て，「音声コーパスのアノテーション ― 経験の共有」のテーマでフランスから二名，日本国内から一名の研究者を招き，講演を一般公開する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4 件）

1) TAKAGAKI, Yumi « La cohésion lexicale en phrase nominale avec un nom sans déterminant », in *Actes du CMLF 2018 – 6ème Congrès mondial de linguistique française* EDP Sciences 発行，掲載決定，2018 年 7 月出版予定　査読有.

2) TAKAGAKI, Yumi « Perspective contrastive sur les conventions textuelles dans l'éducation interculturelle : le cas des apprenants japonais du français », in *Actes du XIVe Congrès mondial des professeurs de français Fédération Internationale des Professeurs de Français.* 掲載決定, 2018 年 9 月までに出版予定　査読有.

3) TAKAGAKI, Yumi « Les interprétations des noms de titre familial à l'emploi non vocatif : l'embrayeur, l'empathie et les plans d'énonciation », in *Actes du CMLF 2016 – 5ème Congrès mondial de linguistique française* EDP Sciences 発行 2016 年 pp. 1-13 (DOI: http://dx.doi.org/10.1051/shsconf/20162706009) 査読有.

4) TAKAGAKI, Yumi « Differences in the logic and textual organization of French and Japanese: Implications for academic writing education », *NU Ideas* Volume 4, issue 2, Proceedings of the Second International Symposium on Academic Writing and Critical Thinking (AWCT2015) 2015 年 pp.29-37. (http://nuideas.ilas.nagoya-u.ac.jp/Volume2-2/2-2_Contents.html) 査読有.

〔学会発表〕（計　3 件）

1) TAKAGAKI, Yumi « La cohésion lexicale en phrase nominale avec un nom sans déterminant », 第 6 回フランス語学世界大会 2016CMLF CMLF 2018 - 6ème Congrès mondial de linguistique française　フランス語学研究所 Institut de Linguistique Française 主催, 2018 年 7 月発表決定，モンス大学(ベルギー)

2) TAKAGAKI, Yumi « Perspective contrastive sur les conventions textuelles dans l'éducation interculturelle : le cas des apprenants japonais du français », 第 14 回国際フランス語教授連合世界大会　XIVe Congrès mondial des professeurs de français 国際フランス語教授連合 Fédération Internationale des Professeurs de Français 主催, 2016 年 7 月 16 日リエージュ大学(ベルギー)

3) TAKAGAKI, Yumi « Les interprétations des noms de titre familial à l'emploi non vocatif : l'embrayeur, l'empathie et les plans d'énonciation », 第 5 回フランス語学世界大会 2016CMLF　CMLF 2016 - 5ème Congrès mondial de linguistique française　フランス語学研究所 Institut de Linguistique Française 主催, 2016 年 7 月 5 日トゥール・フランソワ・ラブレ大学(フランス)

〔その他〕

翻訳

Gabriel Bergounioux 著　高垣由美（訳）「フランスの高等教育における研究倫理―オルレアン大学の例」(原題 L'éthique de la recherche dans l'enseignement supérieur en France. L'exemple de l'Université d'Orléans）　*RI* (Research Integrity Reports), vol. 2, 大阪府立大学２１世紀科学研究機構研究構成インスティチュート　2017 年 3 月 31 日　pp.3-13. (http://hdl.handle.net/10466/15216)

書評

高垣由美　「Hidden, Marie-Odile (2014). *Pratiques d'écriture – Apprendre à rédiger en*

langue étrangère, Paris : Hachette, 160 p.」*Revue japonaise de didactique du français*, vol. 10, n°. 1&2　**日本フランス語教育学会**　2015 **年** 9 **月**　15　**日**　pp.167-168　(DOI: https://doi.org/10.24495/rjdf.10.1-2_167)

６．研究組織

(1)**研究代表者**

高垣　由美（TAKAGAKI YUMI）
大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・教授
研究者番号：602531267

(2)**研究分担者**

なし

(3)**連携研究者**

なし

(4)**研究協力者**

Gabriel Bergounioux　**フランス国オルレアン大学・教授**
森田美里　龍谷大学・非常勤講師，大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・博士後期課程在学中